

第 40 回日本核医学技術学会総会学術大会 印象記

石黒 雅伸
Ishiguro Masanobu

第 40 回日本核医学技術学会総会学術大会は神戸国際会議場、神戸国際展示場 1 号館（神戸市中央区）にて 2020 年 11 月 12 日（木）～14 日（土）に開催された。大会長は長木昭男先生（倉敷中央病院放射線技術部）、実行委員長は松本圭一先生（京都医療科学大学医療科学部）で、第 60 回日本核医学会学術総会（会長 千田道雄先生 神戸私立医療センター中央市民病院分子イメージング研究部）と合同開催、大会のメインテーマは「ネットワーク上で発展する核医学」であった。例年どおり、日本画像医療システム工業会（JIRA）主催の併設展示会も同様に開催された。当初、会場は神戸国際会議場、神戸商工会議所会館及びアリストンホテル神戸であったが、神戸マラソン大会の開催中止に伴い神戸国際会議場及び神戸国際展示場での開催に変更されたと伺った。COVID-19 感染拡大に伴い、本大会は日本核医学技術学会にとって初のハイブリッド開催であった。幸いにして、筆者は現地会場での参加が可能であり、ハイブリッド開催を直に体験することができたので報告する。

筆者の神戸の印象は「ハイカラな街」、「港と山」であった。大会ポスターはその印象がとても反映されており、近年の総会学術大会の中で一番のお気に入りである。COVID-19 感染拡大が心配される中、神戸入りしたのは大会前日の 11 月 11 日であったが、新幹線等の交通機関は混み合うこともなくスムーズにチェックインできた。学会場である神戸国際会議場及び神戸国際展示場のメインとなる出入口数か所には、感染防止を促す注意書きと共に専属スタッフが配置され、サーモグラフィによる体温確認や手指消毒の奨励、マスク着用励行等が案内されていた。

会場内の座席間隔は約 1 m の距離が保たれており、また国際会議場ではすべての会場についてサテライト会場が準備され、参加者が密になることが無いよう配慮が成されていた。手指消毒液はトイレ等の手洗い場はもちろんのこと会場内各所に配置され、感染防止対策については万全が期されていた。本大会では例年大会場受付で行われる参加受付の混雑を避けるため、大会実行委員会より事前参加、直前参加登録が推奨されていたこともあり、大会期間中通して受付の混雑は見られなかった。神戸大会実行委員会の情報では本大会の参加登録者は事前参加登録、直前・当日参加登録が両学会合わせて 2,289 名で、現地参加は約 800 名であった。

プログラムは卒後教育、基礎講演、一般演題、シンポジウムに分けられており、特記すべき点として第 1 会場でのセッションはライブ配信、またすべてのセッションが後日オンデマンド配信されていたことである。初のハイブリッド開催であることもあり、会員に対する実行委員会の配慮が伺えた。会員による一般演題は口述発表、ポスター発表であった。口述発表では現地参加者は会場でプレゼンテーションを行い、Web 参加者は発表動画が再生され、発表後の質疑は Zoom を用いてディスカッションされていた。演者席、座長席はそれぞれ距離を保ち、またアクリル板が設置され、ここでも感染防止対策は万全に行われていた。ポスター発表は神戸国際展示場 1 号館の一部を使用して行われ、発表及びディスカッションの内容が録音されていた。ポスター発表は現地参加ができない会員も一部見られた。そのような演題は座長が上手く采配し、セッションは無事

進行していたと思われた。大会最終日に実施された卒業教育プログラムは3講座行われ、現地会場ではそれぞれ70~90名ほどの参加があった。後日実施されたオンデマンドによる受講状況は3講座それぞれ160~200名ほどの受講があったと伺った。

本大会のプログラムの中で、これまでの大会になかった企画として大会2日目、3日目の朝7:30からモーニングセミナーがあった。これは会場がポートアイランドにあることから、三宮方面からの公共交通機関でのアクセスがポートライナーのみになり、通常のプログラムが開始される8:30前後の時間は三宮からの経路において朝の通勤ラッシュと重なり非常に混雑することが分かっていたため、少しでも通勤ラッシュとの時差を設けるため企画されたと伺った。モーニングセミナーでは前日までに行われたプログラムのハイライト上映が行われており、2日目は会長・大会長講演、3日目は緊急合同セミナー（演題名 新型コロナウイルス感染防止と画像検査所見）と久田賞受賞講演が2会場それぞれで上映されていた。モーニングセミナーはランチョンセミナーと同様に整理券が配布され、軽食と飲み物の提供が行われており、軽食のパンは神戸で有名なパン屋さんのもので、とても美味であった。大会実行委員会の引継ぎ会で伺った話であるが、モーニングセミナーについては大会直前まで開催の有無について協議されており、軽食配送のための注文期限に間に合わなかったため、松本実行委員長はじめ実行委員会スタッフが大会2日目、3日目早朝にパン屋さんまで買いに行かれたそうである。写真は引継ぎ会后に撮影したもので、左から青木氏、筆者、長木氏、松本氏



写真：左から青木氏、筆者、長木氏、松本氏

本大会では感染拡大防止のため、会員情報交換会が行われなかった。普段お会いできない先生方と食卓を囲むことができるのが、学会参加の醍醐味の1つであると認識している筆者にはとても残念であったが、ここで気を緩めることは現地参加ができなかった会員諸氏含め、実行委員会の皆様の努力が気泡と化するため自重した。また初のハイブリッド開催である本大会が盛会に行われたことは長木大会長、松本実行委員長はじめ実行委員会の皆様及び関係各位のご尽力によるものであったと、深謝申し上げたい。

稿を終えるにあたり、本紙面をお借りして第41回日本核医学技術学会総会学術大会（名古屋大会）の開催についてお知らせしたい。会期は2021年11月4~6日の3日間、名古屋国際会議場（名古屋市熱田区）にて、第61回日本核医学会学術総会（会長：外山宏先生 藤田医科大学医学部放射線科）との合同開催である。名古屋での開催は第36回大会（大会長：東直樹先生）に続いて2回目の開催である。名古屋大会のテーマは「好きです、核医学。: We love Nuclear Medicine.」とした。核医学に携わる方々には、おおよそ賛同いただけるテーマであると思われる。名古屋大会では現段階において、神戸大会同様にハイブリッド開催を予定している。核医学専門技師認定更新の単位が取得できる卒業教育講演は初日午前に予定する。講義内容をビデオ録画し大会中別会場にて上演する予定で、他セッションとの重複等で講演が聞けない方々にも後ほど聴講、単位認定書の発行ができるよう企画している。基礎講演では、核医学を始めたばかりの方々やエキスパートの方々にも興味を持ってご参加いただける内容を、実行委員会にて準備している。例年大会中に行われる情報交換会は実施する予定である。第36回大会で多くの先生方にお褒めの言葉を頂戴した「名古屋めし」をご堪能いただきたい。情報交換会では、杏林大学 須山淳平先生を中心としたBIG BAND JSNM all stars 2021によるJAZZ演奏会が企画され、現在大会ホームページ上でメンバー募集が行われている。職種、演奏経験は問わないということなので、この機会に是非ともご参加いただきたい。COVID-19感染拡大が収束し、これらの企画が行えるよう、また皆様と名古屋でお会いできることを祈願する。

（藤田医科大学病院 放射線部）